

みなさん、こんにちは！9月23日（土祝）の「福岡市子ども読書フォーラム」にはたくさんの方がご来場いただきありがとうございました。図書館員の100冊の絵本の部屋にも1000名を超える方々がご来場いただきました。ありがとうございました。さて、今月は読書週間も始まるということで、少し読み応えのある本や科学の本も紹介していきたいと思います。どちらもとても楽しんで読める本です。読書週間を機にいつもは手にしない本にも挑戦してみませんか？

『ぼくのぱんわたしのぱん』

神沢 利子 ぶん 林 明子 え 福音館書店 880円 科学絵本

<お勧め年齢>

幼稚園★★★ 小低学年★★★ 小中学年★★☆ 小高学年☆☆☆ 中学☆☆☆
高校☆☆☆

（★が多い年齢の子どもにお勧めです。）

<本の紹介>

ぱんやさんにならんだぱんをみていたぼくたちは、じぶんたちでぱんをつくってみることにした。ぱんはなにからできるのかな？こむぎこにしおにさとう。でもこれだけじゃたりないみたい。みずやたまごやばたー、それからいーすともいれて…。よくこねたら、こんどはちからいっぱいたたきつける！さてさて、おいしいぱんはできあがるかな？みんなもこのほんをよんだら、きっとぱんが作りたくなるよ！

<子どもに手渡すときのポイント>

ぱんの作り方が順序よく紹介してあって、物語としても楽しめるほかに、ぱんの作り方が良くわかる本です。読み終わった後、家族で、教室でぱんを作ってみるのもいいのではないのでしょうか？わかりやすい絵で描いてあり、かかる時間は時計で示してありますが、材料の細かいグラム数などは書かれていないので、事前に他の本で確認しておくともよいかもかもしれません。



『えんの松原』

伊藤 遊 作 太田 大八 画 福音館書店 1575円 読み物

<お勧め年齢>

幼稚園☆☆☆ 小低学年☆☆☆ 小中学年★☆☆ 小高学年★★★★ 中学★★★★
高校★★☆

(★が多い年齢の子どもにお勧めです。)

<本の紹介>

『えんの松原』の主人公である音羽の両親は怨霊の祟りが起こしたといわれている疫病にかかって死んでしまい、音羽は罪のない人々を殺してしまう怨霊というものを心から嫌っていました。彼は、両親の死後、血のつながっている貴族の家でおばさんと一緒に暮らしていたのですが、あることがあっておばさんともどもそこでは暮らせなくなってしまいます。行くあてがなくて困った二人は、その貴族の姉であり、内裏といって帝が住んでいるところに勤めている伴内侍というおばあさんのところへ行き、音羽をしばらく預かってもらうことにしました。音羽は実は音羽丸というれっきとした男の子なのですが、内裏のなかでも伴内侍が勤めていた温明殿では男の子は働くことができません。それで音羽丸は女の子の格好をして名前も音羽に変えたのでした。音羽は自分が男の子であることを気づかれないよう、なるべく目立たないように日々を過ごしていたのですが、ある日、帝の宝物を収めてある部屋に入り込んだ男の子を見つけます。そしてその男の子は実は「東宮 憲平親王」だったのです。東宮とは今の皇太子のこと、そうその男の子は次に帝になる人だったのです。そんな彼が何ゆえこっそり宝物を見にきたのか。それは、彼が東宮になるにあたっての事情で怨霊に祟られているといわれていたからでした。憲平は毎晩鳥の形をして憲平のもとにやってくる怨霊とたった一人で戦っていたのです。音羽は、忘れ物を取りに前住んでいた屋敷へ行く途中、たまたま怨霊の住処を発見します。それは、大内裏の中にありながら不気味な松林「えんの松原」だったのです。実は「えんの松原」はその昔「怨の松原」とよばれていたのです。

憲平は、憲平を守るとされているお坊さんのあじやりに絶対怨霊を見てはいけないといわれていました。けれどもある日、憲平は怨霊を見てしまったのです。すると怨霊は今までいわれていた人物ではなく小さな女の子であることがわかります。憲平はこのことを音羽に話し、二人は怨霊の正体を突き止めようとしませんが……。音羽は憲平を助ける事ができるのでしょうか？そして怨霊の正体とは？

この本は平安時代ならではの場所や名前がたくさんでできますが、それが正確にわからなくても十分たのしめます。

歴史に詳しい人ならもっと楽しめる一冊です。ぜひ手にとってみてください。

<子どもに手渡すときのポイント>

平安時代の物語で馴染みのない単語がたくさんでてきますが、物語が面白いので少々難しくとも一気に読んでしまう本です。小学校高学年からお勧めできるでしょう。わからない単語や平安時代特有の着物や道具などは写真付の本を紹介してあげると物語の世界が更に広がります。中学生、高校生、大人までもが夢中になれる面白さです。



このコーナーで紹介した本はお近くの図書館や書店にあります。ぜひ手に取ってみてください。

早良図書館 吉岡 さやか